

さず候

⑱クラブの学生は如何致しをり候や 何とかやりをり候や しばらくならばあの仲間に入りてもよろしくと存じ候へども、これも応急にて、これから先永くやれるものにては無之候 あの連中と寝食を共にすれば、監督にもなり美校としても好都合かも知れ申さず候へどもそれは戦時中ならばとも角、研究したい、勉強したいと思ひ、それによつて今後国家へ奉仕したいと念ずる者は到底出来まじく候 監督は全然身を犠牲にして世話してやらねば効果無しと存じ申候

巡察の際学生が比較的よく云ふ事を聞き愉快にやれしも、小生が全く寝食を共にして勤勞せし為にて小生は戦時中授業停止、従つて研究も不能となりし為、覚悟をきめてやりし為に候 士官待遇で士官室で食事し寝起ししをりては学生はついでには参らず候 美校の宿直室をお借りせざりし理由も「宿直室を借りる位なら学生の世話をする」「学生の世話をする位なら研究を犠牲にして世話をする」「研究したければ、たゞ宿直室にはいりこむ」等と云ふ事はしない、との意に候ひき

⑲事務官が物色されをりし学校職員の寮の如きものは如何相成候や 若しそれが出来居れば勿論それにてよろしく候間御一報賜り度く早速その方へお願ひ申上度候

⑳特に御呼び出し必要の節は至急公用につき出校せよとの命令書

又は電報等頂戴致し度、その証明があれば或は幾分切符が買ひやすきかと存じ申候

㉑冬休みがもうきれて、当然二月一日から上京出校すべきにきまりをるに今更御呼び出しを願ふ等実に失禮千万とは存じ候へども以上の諸項御賢察の上何分の御高教を賜り度御願申上候

乍筆末両先生並びに御家族皆様の御健勝切に奉願候 敬白
昭和二十一年二月十三日

西 田 正 秋

村田先生御讀了後校長先生へこの拙書御提示下さるか御話し被下るか何卒よろしく御願申上候

⑩ 焼失作品

本校自体は殆ど戦災に遭わなかったが、戦時中に文庫収蔵品中、文相官邸等に貸し出してあった左記の作品が焼失した。

昭和二十年四月二十五日文相官邸にて焼失

雨中のセーヌ河 小林万吾筆

群集 (リュクサンブール公園) 湯浅一郎筆

高原の雪解くる 辻永 (第六回新文展政府買上品)

あふぎ 長谷川昇(同)

同年五月二十四日文部大臣官舎に貸し出し中戦災により焼失

華嚴瀑之図 山本芳翠筆

雲の峰 山本森之助筆

雑草 柴崎恒信筆

ニルベ河の雨 矢崎千代二筆

春の岬 中野宮三筆

ぼけの花 中村勝治郎筆

日蔭棚 安宅安五郎筆

港 工藤三郎筆

船 小林鍾吉筆

初冬晩暉の図 岡田三郎助筆

廃園 白瀧幾之助筆

南方収獲図 伊東深水筆

⑪ 終戦前後の学生生活

学徒出陣により多数の生徒が去った本校では、残った生徒もまた異常な学生生活を強いられた。当時の在校生であった市瀬幸助氏が資料を寄せて下さったので、この空前絶後の異常事態について記録しておく。

市瀬氏は昭和十九年四月に日本画科に入学した。一カ月程していきなり美校改革が断行され、新旧教師の交替があったが、一方戦局は日毎に悪化し、正常な授業が行われたのはその年の夏休みあけまでであった。秋には全学生に勤労働員の命令が下り、氏は各科混合編成三十名程の隊に加わり、内藤春治引率のもと、盛岡市郊外の陸軍航空整備隊へ行き、続いて西田正秋引率のもと、郡山市郊外の同様施設に配属され、整備兵教育用の教材掛図作成に従事した。十一月下旬に一旦動員解除となって帰京したが、その翌日からB29による大空襲が始まった。

翌二十年四月、進級と同時に再び勤労働員となり、羽石弘志引率

のもと、戸塚海軍衛生学校に行き、衛生兵教育用掛図等の作成に従事。無理な生活がたたって病気になる、一時郷里の飯田に帰って休養し、八月九日に上京。その翌日、父に宛てて次のように書き送った。

前略、昨九日午前四時、無事着京致しました。道中、辰野駅待合室で二時間待たされました。途中で空襲警報が発令されました。中央線の車内は、身体を動かすことの出来ない程の混雑でした。今朝は午前七時起床と同時に空襲となり、B29数編隊が来襲、板橋方面が大分やられました。当方は無事でした。只今午前十時、警報が解除になりましたので、これから戸塚へ出掛けの予定です。

(二伸) 日ソ戦争状態に入れり、とのニュースを聞き、大いに驚きました。愈々最後の段階になりましたね。日ソ間を多少とも有利に考えていた楽観は見事に裏切られました。僕もいつ召集されるかわかりません。これからは空襲も南北から一層はげしくなるでしょう。呉々も気を付けてください。

八月十五日、氏は教務に用事があって登校すると、美校生は一人も居らず、教室を借りていた外事専門学校の生徒たちが居るばかりで、彼らとともに戦争終結の玉音放送を聞いた。その二日後に再び父に次のような手紙を出している。

前略、飯田から戻って以来この十日程の間に、世の中は信じら